

国際仏教学大学院大学研究紀要

第 10 号 (平成 18 年)

Journal of the International College  
for Postgraduate Buddhist Studies  
Vol. X, 2006

## 梵天勸請の類型

原 實

## 梵天勸請の類型\*

原 實

六年間の試行錯誤、難行苦行の末、菩提樹下で開悟した釈迦族の王子は、暫し己が悟りの内容に満足して一人静かに坐し、これを世人に説いて布教しようとは思わなかったと謂われる。その内容が余りにも深遠に過ぎて、世人の理解を超絶すると思っていた故である。その意中を知った梵天が天上より降って彼に布教を促したとなすものが有名な梵天勸請の物語で、それは古くパーリ原典に語られ<sup>1</sup>、又大智度論等<sup>2</sup>の漢訳仏典にも伝えられた。今、阪本（後藤）純子博士の研究によってその Pali, Skt の全 version に共通する荒筋を示せば、それは次の如き構造を有している。

(A) 世尊の成道後 Uruvelā/Uruvilvā の Neraṇjarā/Nairamjanā 河畔の樹下で禪定に沈潜して独居を楽しみ、自らの悟った真理は深遠難解に過ぎて説法すまいと考える。

(B) 世界の滅亡を危惧する梵天が梵天界から降り来って、衆生の多様性を説いて説法を勸請する。

(C) 世尊は佛眼をもって観察し、衆生の資質の多様性（蓮の比喩）を認識して慈悲を垂れ、説法を宣言、梵天は喜んで姿を消す。

この中、(A)-(C) は定形的表現を中心とする散文で語られ、常に Śloka 2 句と Triṣṭub 二句を伴っている。その中、Śloka 二句は世尊の考え（A の

---

\* 本稿は平成 17 年度本学の演習に用意した草稿を基とし、その概要を筆者は平成 18 年 1 月 18 日に開催された本学の研究会において口頭発表した。演習に参加された E. Legittimo、興津香織両氏と、研究会に参加して種々教示を賜った木村清孝学長以下本学教員各位に感謝の意を表する。

<sup>1</sup> Cf. 森他編 107-110. そこには関係箇所が列举され、研究者に便宜を供している。

<sup>2</sup> 大正 25. 63ab. Cf. Lamotte 57-62, 梶山—赤松 46ff.

総括)、Triṣṭub 第一は梵天の勸請の言葉 (B)、Triṣṭub 第二は世尊の説法宣言 (C) となっていると言われる<sup>3</sup>。

今から約 80 年前宇井伯寿博士は「阿含に現れた梵天」と題する長文の論稿を発表して研究史に一時期を劃し<sup>4</sup>、又この物語の原型は既述の阪本博士の究める所となった。それらを総合的に比較研究してこの主題を検討すること自体、独立の研究課題となると思われるが、筆者はこの問題を文献学的に研究する能力を欠くので、以下の論述は唯 Motif としての「梵天勸請」を扱うに留まる。

仏伝中のこの物語が何時、又どのような動機から仏教徒の間に作成伝承<sup>5</sup>される様になったかに関しては幾人かの学者が仮説を発表した。例えば中村元博士は「当時最高の神が勧めたということによって説法開始を権威づけた」<sup>6</sup>となし、又高崎博士はここに「ヒンドゥ教の最高神に勸請の役目をさせて仏教優位を強調せんとする仏教徒の意図」を見ようとする<sup>7</sup>。宇井博士も「梵天にすら讃嘆せらるるとすれば、これ等の凡て、即ち佛教の優れたものなることが明にせられるであろう」と言われる<sup>8</sup>。併し梵天それ自体がどの程度ヒンドゥ教徒内に権威を保っていたかが問題とされ<sup>9</sup>、事実中世 Hindu 教に於いて Viṣṇu-Śiva 両神に比較すれば、彼は明らかに帝釈天と共に後退している。何故なら梵天は苦行によって満足させられると悪魔、神を問わずその願い事を叶えたから、謂わばその「脇の甘さ」の故にしばしば神界に混乱を齎し、帝釈天はその好色性と諧謔性という人間的弱さを露呈している故である。ヒンドゥ教の二大神とは全くその性格を異にするものとして、梵天と帝釈天の両者は仏典に登場する。更に又、こ

---

<sup>3</sup> 阪本 474-3

<sup>4</sup> 宇井, 65-202

<sup>5</sup> 宇井 184, 200.

<sup>6</sup> 中村 449

<sup>7</sup> 高崎 33

<sup>8</sup> 宇井 179-180, 186.

<sup>9</sup> 宇井 157

れら上述の解釈を排して、これを「思想体験とその言語表現」との相克という全く別の観点から解釈し、同じ事が法華經に見えりとする新解釈も打ち出されている。それは一面に於いて梵我一如の体験が唯否定的 (*neti, neti*) にしか表現出来ないとなすに似ているが、又他面「不立文字」や「言語道断」<sup>10</sup>の考え方を想起させる<sup>11</sup>。筆者はこれら学者の議論の可否を論じる能力を欠くが、これらの仮説を踏まえつつ仏典の「梵天勸請」に類似した物語が二つの叙事詩にも語られている事実を以下に紹介して、問題点を比較してみようと思う。

梵天はマハーバーラタの冒頭部分にその作者とされる Vyāsa の前に現われ<sup>12</sup>、又ラーマヤナの最初部分にも Vālmiki の前に現われて彼等に語り掛け、これら二人の作者に夫々の叙事詩を後世に伝える様に勧めている。その限りにおいて、これら二つの叙事詩も仏典の「梵天勸請」と同類の形を具えていると言う事が出来るが、両叙事詩の場合梵天は作品の冒頭に現れ、又その言は「勧告」であっても「勸請」ではなかった<sup>13</sup>。

但しマハーバーラタのこの「梵天勸告物語」を盛る部分は原典の伝承に問題のある所で、それは南インドの写本群にのみ限定されているから、ブーナ批判版はそれを本文部分に含めず、補遺部分に廻してている。併しこの補遺部分に於いてすら、伝承に出入りがあるがそれ自体多くの問題を含んでいる。と言うのも本邦古事記の「稗田阿礼が諳んずる所を太安万侶が筆記した」の記事に相当し、且つは後世インドで有名になった「聖仙 Vyāsa の唱える所を象面の神 Ganeśa が筆記した」となす叙事詩の筆写物語は、この補遺部分に更に後世追加された部分であった故である<sup>14</sup>。

<sup>10</sup> Cf. Taitirīya Upaniṣad 2. 4. 1, 2. 9. 1 *yato vāco nivartante, aprāṇya manasā saha*

<sup>11</sup> 下田 1999 and 2001. 類似の試みは Hiltebeitel 304ff., 315ff. にも見える。

<sup>12</sup> Sullivan は Vyāsa と仏陀を同列において論じているが (107-109, 114)、筆者はもとよりこの説を取らない。

<sup>13</sup> Sullivan はこの三者をも同列に論じている (13)。両叙事詩の書写物語の比較に就いては Hiltebeitel 317ff. 参照。

<sup>14</sup> Lüders 25-26, Winternitz (2)(3).



一方ラーマヤナの場合もこの部分は一応バローダ批判版の本文中に組み込まれてはいるものの、その第1巻は第7巻と共に成立が遅く<sup>15</sup>、その中でもこの「梵天出現」の部分は更にその成立が遅い。それは有名な「śloka 発見物語」の中に語られるが、この「śloka 発見物語」と「梵天出現」はそれ自体決して必然的關係に立つものではなく、後者は前者の中に後世人為的に組み入れられた事が明らかである。

この様に両叙事詩に於けるこの「梵天勸告」の場面はそれ自体が複雑な問題を含んでいるが、そこに果たして仏陀の「梵天勸請」の如き「権威付け」の動機を見得るか否かは学者の間に意見が分かれる。併し細部の問題をさておいて、両叙事詩に見える「梵天出現の Motif」だけを取り出して、仏典の「梵天勸請」と比較検討してみることも強ち無意味とも思われない<sup>16</sup>。

このような事情の下に筆者は本稿に於いて先ず両叙事詩に語られる「梵天勸告」の部分を翻訳紹介し、それらを分析検討して仏典の「梵天勸請」と比較し、類似点と相違点を明示して仏典の「梵天勸請」の特異性を明らかにしたいと考える。解説の順序として先ず批判版の本文に編入されている Rāmāyaṇa の物語を扱い、次に批判版の補遺に廻されている Mahābhārata のそれを扱う。但し前者の場合には、かなりの異読が挙げられているので、それらを注記の方で論ずるが、部分的に尚難解な部分を残している。

### R. 1. 2 の邦訳

このナーラダの言葉を聞き終ると、言葉巧みにして<sup>17</sup>有徳な大仙は弟子

<sup>15</sup> Cf. J. Brockington 348. 彼によれば現存の R は発展の 5 段階が区別され、第 1 巻と第 7 巻はその第 3 段階成立とされる。

<sup>16</sup> 仏教とバラモン教の類似に就いては幾つかの優れた研究があるが、物語モチーフとして任意捨命 (*icchā-maraṇa*)、人物類似に仏陀とビーシュマのそれがある。前者に関しては Jaini (1), 及び Edgerton、後者に関しては von Simson の研究がある。

<sup>17</sup>

ヴァールミーキは、弟子と共に吃驚仰天した。そして大仙は心の中でラーマを供養した。(128\*)

- と共に、彼に対して心からなる敬意を払った。(1)
- 斯くの如く神仙ナーラダは、然るべく款待された後、暇乞いをして天上に帰った。(2)
- 彼が天界に帰って程なく大仙は、ヤムナー川に程遠からぬタマサー川の岸辺に赴いた。(3)
- タマサー川に着いてから、かの大仙は泥で濁っていない（適当な）沐浴場を探しあて、近くに侍る一人の弟子に言った。(4)
- 「バラドヴァージャよ、この濁りなき沐浴場を見よ、清水湛えて愉しく、（濁りなき事）善人の心の様だ<sup>18</sup>。(5)
- （一先ず）甕をおろして、私の樹皮衣を出してくれ。余はこの最上のタマサー川の岸辺で沐浴しようと思う」<sup>19</sup>(6)
- 気高きヴァールミーキに斯く言われてバラドヴァージャは、恭しく師である仙に樹皮衣を捧呈した<sup>20</sup>。(7)
- 弟子の手から樹皮衣を受取ると、感官を制して<sup>21</sup>、暫し彼は遙か彼方の広大な森を見渡した。(8)
- すると聖者は、その側に一對の鶴が恐れも知らず飛廻り、可愛らしく囀っているのを見た。(9)
- ところが、その番の中の雄の方を、心悪しき獵師は敵意を籠めて、彼の見ている前で射殺した。(10)

---

彼等全ての仙人達も、又かの仙人中の牡牛も。(129\*)

<sup>18</sup>

ここは沐浴の場に相応しい、愛しき者よ、水も綺麗で、砂も細かいから。(130\*)

<sup>19</sup>

「汝は急いで帰り、庵から樹皮衣をここに持って来てくれ。

時間が余り掛からぬように、宜しく頼む」(131\*)

<sup>20</sup>

彼は師の言葉を体して急ぎ庵に行き、樹皮衣を持ち帰って師に手渡した。(132\*)

<sup>21</sup>

水に潜って沐浴し、言葉を制して低唱の祈禱なし、

儀規に則り水にて先祖の神々を爽快にし満足させてから、(133\*)

血まみれになって、地上でもがいた挙句<sup>22</sup>、死んでしまった雄鳥を見て、雌鳥は悲痛な叫びを上げた<sup>23</sup>。(11)

この雄鳥 (dvija) が獵師によって殺されたのを見ると、人の道を知っている (dharma-vid) 仙人には、憐れみの情が込上げて来た。(12)

憐憫の情を知る故に、このバラモン (dvija) は「これは道に悖る (adharma)」と思って<sup>24</sup>、泣き叫ぶ雌鳥に向かって次の様に言った<sup>25</sup>。

(13)

「獵師よ、永遠に安息の地に到る事勿れ、汝は番の鶴の中で、愛に恍惚としている雄鳥を殺したれば」<sup>26</sup> (14)

斯く言いつつも、彼の心に不安がよぎって、次の様な思いが生じた。

「この鳥の悲哀に心を痛めた私は、一体何を口走ったのか」と。(15)

気になりながら、聡明な大知者は思いを凝らした。そして仙人は弟子に向かって次の様に言った<sup>27</sup>。(16)

---

22

息も絶え絶えに、やっとの事で力の限り叫んでいるのを彼は見た。(134\*)

大空を舞う雌鳥は、それを見て傷つき、悲痛な声を挙げて泣いた。(135\*)

23

彼女は一緒に楽しんでた、朱き冠頭の連れ合いが斃れて、別離を余儀なくされたのである。(136\*)

地上に降り来たって、歎き悲しみ涙に咽ぶ雌鶴と、(137\*)

24

「おお何と、この残忍にして思慮浅き獵師により、世に咎められたる悪業がなされたことか」(138\*)

<sup>25</sup> ここで、*dvi-ja* (二度生れ変わるもの) の両義 (鳥とバラモン) に懸け、賤民 (*niṣāda*) がこの *dvi-ja* を殺すことは *dharma* に反するとするのである。

<sup>26</sup> 前後を弁えず愛欲に耽り、恍惚境に在る交会中の男性を殺す者は、古代インドに在って非難の対象となり、仙人の呪詛を蒙った。同類の有名な物語は *Kimdama* 仙の物語に見え、それは *Pāṇḍu* 王が命を落とす悲劇に連なっている。尚、愛欲、就中射精を妨害された者の呪いは *Brhaspati* による *Dīrghatamas* 呪詛にも見られる。(MBh. 1. 98. 12-16, 12. 328. 44-48)

27

一瞬、彼は反省し、その文言に思いを凝らしてから、側にいた弟子のバーラドヴァーージャに次の様に言った。(139\*)

「音節等しく脚を踏み、弦の拍子に合った叫び (*śloka*) が、悲哀に心を痛めた余 (の口) から迸り出た。必ずやこれが「頌」 (*śloka*) となる様に」<sup>28</sup> (17)<sup>29</sup>

一方、斯く言う仙人の最高の言葉を、弟子は喜んで「全くその通り」と嘉納すると、師は彼に満足した。 (18)<sup>30</sup>

仙人はその沐浴場で然るべく沐浴したが、尚その事ばかり考えながら帰って行った。 (19)

学識ある弟子バラドヴァージャも、恭しく師の満水の甕を持ってその後

に就いて行った。 (20)

有徳の彼は弟子と共に庵に入り<sup>31</sup>、座して雑談を始めたが、

尚 (何時までも) その事が気になっていた。 (21)

ここに造物主なる尊き梵天は、四面を具えて光輝き、

この仙人の雄に会うために、親しく自ら到来された。 (22)<sup>32</sup>

ヴァールミーキはそれを見て吃驚仰天、突然起立し、言葉を制し心を籠

めて合掌した。 (23)

彼は身を屈め、御機嫌如何ですかと挨拶してから、儀規に則り洗足水、

闍伽、座、敬礼を以ってこの神を款待した。 (24)

---

<sup>28</sup> *bhavatu nānyathā* の句を先行の *śloka* に掛けるか否かに就いては議論があるが、今は Vaudeville に従って、しばしば呪句や誓言に用いられる用例に従った。Vaudeville は、この呪句が元来、夫を殺された雌鳥の発するものであるものを Vālmīki が替って述べていると言う。

<sup>29</sup>

「等しい数の音節を具えた、四つの脚より成るこの文言は、哀悼しつつある (*śocat*) 余によって述べられたから、それは (そのまま) 頌 (*śloka*) とならねばならぬ。 (140\*)

<sup>30</sup>

「まさしく、その通り」と喜びを満面に現しながら、彼は師に答えた。 (141\*)  
彼は弟子と共に会話を交わしつつ、その時、 (142\*)

<sup>31</sup>

己を制した大仙バラドヴァージャは、後から彼について行った。 (143\*)

<sup>32</sup> 独立自存の神は、親しくこの優れた仙人に会う為に、 (144\*)

恭しく奉獻された座に着くと、神は大仙ヴァールミーキにも座を勧めた。

(25)<sup>33</sup>

この世界の祖父が、眼の前で着席した時も、ヴァールミーキはあの事ばかり心に思っ、気にかけていた。

(26)

「悪性の男は、敵意を籠めてとんでもない事をしたものだ。あの様に愛らしく囁いていた雄の鶴を、理由もなく、殺したのだから」

(27)

絶えず雌の鶴のこと悼みつつ、悲哀に心を奪われたまま、彼は例の(小) 頌を心の中で今一度口ずさんだ<sup>34</sup>。

(28)

すると梵天は微笑みながら、この仙人の雄に次の様に仰せられた<sup>35</sup>。

「汝は(叫び [śloka] を上げて) 頌 (śloka) を綴ったが、その事について色々と思ひ煩うことはない。

(29)

他ならぬこの余の意図により、バラモンよ、この言葉は汝の(口より) 迸り出たのである。最高の仙人よ、汝はラーマの所行を全て(この頌によって) 綴ってみよ。

(30)

この世に正義を尊び、徳高く、思慮あり、堅忍不拔なラーマの生涯を、汝がナーラダから聞いた通りに、語ってみよ。

(31)

人の知らない、又人の知る、かの思慮深きラーマの生涯を。弟ラクシュマナや羅刹達のそれを縦横に取混ぜて、

(32)

又、ヴィデーハの王女の、公私にわたる生涯の物語も。(これ迄) 知られていなかった事も全て汝の知る所となろう<sup>36</sup>。

(33)

---

33

(世界の) 祖父である、独立自存の神は仙人に恭しく敬礼されて、立派に設えられられた上座に着席された。(145\*)  
梵天の薦めにより、彼もまた席に就いた。(146\*)

<sup>34</sup> *upaśloka* を一句と取るか、*upa-gā-* に懸かる Tmesis と取るか *upaślokaṃ imam punaḥ jagau* の解釈には議論が分かれる。Kölver p. 32, Vaudeville p. 333 (join in singing)

35

「大仙よ、この雄鶴の殺害にまつわって汝が発したが、(147\*)

36

ダシャラタ王とその妃、その王国の挙動、言動(の一切)も、(148\*)

この詩作 (*kāvya*) に於ける汝の言葉は、何一つとして空しいものとならないであろう。

頌 (*śloka*) で綴られ、心愉しく、目出度きラーマの物語を造ってみよ。

(34)

山河がこの地上に存続する限り、このラーマヤナの物語はこの世に語り継がれることとなろう。

(35)

汝の造ったラーマの物語がこの世に語り継がれる限り、汝は天上天下いずこでも、我が世界に住する事となろう」

(36)

と仰せられて、聖梵天はその場で姿を消した。すると仙人ヴァールミーキは、弟子と共に吃驚仰天した。

(37)

その後、彼の弟子達は皆で、この頌 (*śloka*) を再度口ずさんだ。繰り返し、繰り返し唱える度びに、喜びは増幅し、又驚くばかりであった。

(38)

「音節を等しくしている、四つの脚を伴ったものが、大仙によって歌われたが、

それが何度も何度も反復誦唱されている内に、悲哀 (*soka*) は頌 (*śloka*) となって行った」

(39)

すると心清きヴァールミーキには、次の様な思いが起った<sup>37</sup>。「全ラーマヤナを、この様な頌によって、一つの詩 (*kāvya*) に造り上げてみよう」

(40)

(斯くて) その時、等しい数の音節を含み、韻律も意味も上品な、脚を踏んだ心愉しき頌 (*śloka*) の幾百により、令名高く思い気高き仙人は、栄光に満ちたラーマにまつわる有名な詩 (*kāvya*) を造ったのであった。

---

我が恩寵の致す所、全て汝の知る所となるであろう」 (149\*)

正義、愛、実利（と言う人生の目標）と関連し、多くの珍しい事柄に充ちて、宛ら多くの宝物を内蔵する海の如く、人々の耳に延命薬となる、(150\*)

<sup>37</sup>

「我こそは、ラーマヤナ（という）詩を、終りまで造ってみよう」と。

そしてこの聖者はこれを詩の発端 (*bīja*) として、全てを（終りまで）歌ったのである。(151\*)

### Rāmāyaṇa 1. 2 の解説

既述の通り、今に伝わる Rāmāyaṇa の原典成立には複雑な問題が絡んでいて、それが現形を具えるに至る迄に幾つかの段階を経過した事は明らかである。元来悲劇の王子の生涯を綴った物語であったものが、吟遊詩人の謳うところ悪魔退治の英雄譚となり、更にその主人公の神格化 (Viṣṇu の化身) に伴って宗教的要素を具えるに至るが、それ迄にかなりの時間の経過と曲折を辿った事に疑いを容れない。英雄的、神話的両要素の混在は、元来 Ākhyāna (昔話) と呼ばれた Mahābhārata に於いても見られ、それが後世 Smṛti<sup>38</sup> と呼ばれるに至る変質過程にも同様に長い時間がかかった筈である<sup>39</sup>。それは又通常「最初の詩作」(ādi-kāvya) と一般に呼び習わされ、就中 Abhinavagupta を始めとする詩論家の間に言及されている<sup>40</sup>。

ところで、それが Ādi-kāvya と呼ばれる様になった本来の経緯を物語る所謂「śloka の起源物語」は、もと極めて意図的人為的に造られたものであった。と言うのもここに「śloka 発見」と言っても、それは決して殊更新しい事を物語るものではない。もてこの śloka の語は、既に RV に現れ、古く「叫び」乃至は Soma 搾出時の「騒音」、更には戦車の「響き」等を意味し<sup>41</sup>、古ウパニシャドでは Anuṣṭubh のみならず Triṣṭubh をも意味して、極めて一般的に「詩節一般」を指していた故である<sup>42</sup>。従って「śloka 発見物語」と言っても、それは後述の如く śoka と śloka の語呂合わせの為

<sup>38</sup> For the MBh as Smṛti, cf. Kirste 185ff. 哲学者 Kumārila が MBh. を Smṛti と見なし、戦争物語を寧ろ従属的なものと考えていた事実には Kirste 203。それは Bāṇa の場合も同様であり、彼の時代に叙事詩は寺院で朗誦されていた (Kirste 206-7)。結論的に言って AD. 300 年頃には既に Smṛti として通用していたものの如くである (Kirste 208)。

<sup>39</sup> Brockington 20-21. 彼によればそれは大別して四つの段階を経過したと言われる。Cf. also Kölver 37.

<sup>40</sup> 上村 48-9 (但し、そこでは雌雄が転倒している), 77, 228, 250, 354, 538.

<sup>41</sup> Vaudeville 331.

<sup>42</sup> Kölver 35, Horsch 225, 73ff., Vaudeville 332-333.

に、後世人為的に考案されたものに過ぎなかった。

この「*sloka* 発見物語」は、更に「*krauñca* 挿話」と称せられる別の大枠物語の一環として叙事詩の第1巻第2章に語られるが、この「*krauñca* 挿話」が後世の追加である事実は、これに先行する第1巻第1章の最終頌と、後行する第3章の最初頌が、この R. 1. 2. 3 から始る「*krauñca* 挿話」を外してみても、互に極めて自然に連結している事情によって証明される。従ってこの挿話は両者の間に謂わばサンドウィッチ式に、後に挿入されたものであった<sup>43</sup>。

さて、この「*krauñca* 挿話」(R. 1. 2. 3-21) に在って、聖者 Vālmīki とその弟子は偶々「*krauñca* 鳥殺害」現場に遭遇する。ところが R. 1. 2. 22 に到ると、忽然としてここに梵天が現れ、Vālmīki に Rāma の栄光を、今発見したばかりの *sloka* によって綴る様に勧めるが、R. 1. 2. 37 に至ると又忽然と姿を消して天界に戻る。併し、これに続く R. 1. 2. 38-41 は、先行の R. 1. 2. 21 と極めて自然に連結しているから、この「*krauñca* 挿話」自体の中でも、「梵天勸告物語」は更に後世の追加であった事が判明する。従って「梵天勸告」も、元来この「*krauñca* 挿話」の中に、更に後世サンドウィッチ式に挿入されたものであった<sup>44</sup>。

Kölver は、この Rāmāyaṇa に人為的に挿入された「梵天勸告」を、Rāmāyaṇa 作者が己が作品の権威付けの為に利用したものと見ている。即ちこの場面に梵天というバラモン教の最高神格を導入する事は、元来身分の低い市井の吟遊詩人が歌っていた世俗の詩歌をバラモン教圏内に導入し、これを昇格させてこの叙事詩をヒンズー教社会に一定の評価と地位を得させようとする作者の意図の反映に他ならず、梵天の介入はもと Kṣatriya を主題とする叙事詩の Brahmanisierung に資したと Kölver は推測した<sup>45</sup>。

<sup>43</sup> Vaudeville 328.

<sup>44</sup> Vaudeville 328, 334

<sup>45</sup> Kölver 29, 33. 尚、MBh の場合にはバラモンの側が寧ろこの著名な世俗歌を己が圏内に取り込んだと言われる。(Winternitz I. 265ff.)



さて、この「śloka 詩節発見物語」とは、上記の翻訳で明らかな様に、一対の交会中の *krauñca* 鳥の雄の方が蛮族 Niṣāda の射た矢に斃れ、それを見ていた雌鳥が悲痛の叫びをあげる場面を中心に展開している。この鳥が「インド鶴」(Indian Sarus Crane) であった事実は近年 Leslie 女史の明らかにした所であるが<sup>46</sup>、その悲劇を目撃した Vālmīki は雌鳥の *śoka* (悲哀) の叫びを耳にして思わず同情し、雄鳥を射た蛮族を呪うと、その呪いの句が偶々韻を踏んでいたと言うのである。併しその韻文は、Rāmāyaṇa それ自体の言う *baddha* (4 行に等しい音節が結びついたもの) 程度のものに過ぎなかった<sup>47</sup>が、これを敢えて *śloka* (頌) と呼び、ここに *śoka* と *śloka* の音の類似から両者を結びつけてこの物語を結んでいる。

但しこの *krauñca* 鳥の悲哀物語にも幾つかの問題がある。叙事詩は雄鳥を殺した蛮族を呪った者を詩人の Vālmīki としているが、通常この種の呪いの主人公は被害者自身乃至はその親族である。それは Pali Sāma-jātaka や MBh. の Kiṇḍama 仙の物語その他に類例をみる<sup>48</sup>。従ってこの場合雌鳥が蛮族を呪うのが本来であるが、ここで Vālmīki は雌鳥に替って呪詛者の役を務めている。同じ代役の Motif は又「悲哀」にも見られ、*śoka* は元来夫との別離を余儀なくされた雌鳥に帰せられるべきもので、Vālmīki のものでない (Leslie)。主人公はあくまで雌鳥であって Vālmīki ではなく、彼は唯雌鳥の悲哀を感情移入して、*śoka* の代役を果たしているものに過ぎない。

ここに雌鳥はその雄鳥が殺害されて歎くが、この雌鳥の嘆き (*śoka*)こそは、この叙事詩 Rāmāyaṇa の主調をなす貞女 Sitā の歎きに他ならない。

<sup>46</sup> 本論文において著者はこの鳥が何物であったかを検討している。数ある梵英辞典、該当部分の翻訳語は必ずしも一定せず、その正体が不明のままであったものを、彼女は R 本文の鳥記述に徴してその特徴を数え上げ、7 種類 (snipe, curlew, egret, heron, stork, flamingo, crane)、32 鳥の候補の中から順次消去法によって排除し、色、形、泣き声、雌雄の習性等の特徴から結論的にそれを Indian Sarus Crane と特定した。

<sup>47</sup> Kōlver 36

<sup>48</sup> Cf. also MBh, 3, 203. 29.

叙事詩に繰返し述べられる彼女の度重なる不本意な夫との別離はこの「Krauñca 鳥挿話」にこそ象徴されているとは、Vaudeville 女史の立論であった<sup>49</sup>が、Leslie 女史も作者 Vālmīki がここで、彼が最終巻に於いて目撃した Sītā の悲劇を示唆していると説く。両女史の所説に拠れば、叙事詩 Rāmāyaṇa の主人公は Rāma ではなく、寧ろ Sītā であった<sup>50</sup>。そして、この事実はこの叙事詩が「憐憫の情趣 (*karuṇā-rasa*)」を基調としているとなす、後世詩論家の説に符合を見出す如くである<sup>51</sup>。

併し、若し Kölver に従って、Rāmāyaṇa 作者が作品それ自体の権威付けの為に梵天を登場させていたとしても、それは仏典の「梵天勸請」の場合と著しく趣を異にしている。もと吟遊詩人の一人であった Vālmīki<sup>52</sup>の手に成った、元来 Kṣatriya 起源の物語に梵天が権威付けをしたとしても、それは同じ Kṣatriya 出身の仏に対して梵天が「懇情」するのとは、上下関係が全く逆転している。仏典の「勸請」の場合には梵天は仏陀の下位に立ち懇願隷属の形を取っているが、Vālmīki の場合には彼は梵天の出現に吃驚仰天し、起立合掌、恐縮感激の末に上席を用意した。そこでは梵天は上位に立って認可、激励の形を取っている。これ、「梵天勸請」が作品の「権威づけ」どころか、寧ろ佛教のバラモン教への「優位の誇示」にあったとされる所以である<sup>53</sup>。

### Mahābhārata 1. 1 (Appendix) の邦訳

かの尊きドヴァイパーヤナがこの最上の物語を創作した時、 (1)

<sup>49</sup> Vaudeville 334-335

<sup>50</sup> 原、1978.

<sup>51</sup> それは、今一つの叙事詩 MBh. が「寂静の情趣」(*sānti-rasa*) を主調としているとするのに対蹠される。

<sup>52</sup> Cf. Hara 1972

<sup>53</sup> シーターが大地に吞まれて死んでしまった時、ラーマはもう一度シーターを取り返してくれと歎き怒るが、その時に梵天は最後に又ラーマ自身に呼掛けている (Kölver 27-8=R. Appendix No. 13, pp. 642-644)。

「この様に私は（この物語を造ってみたものの、）これを一体如何にして弟子達に教えたものか」

と思案に暮れた。(2)

聖仙ドヴァイパーヤナがこの様に思案に暮れている時、(3)

世界の師、聖なる梵天は彼を憶念して、自ら出向いた、(4)

大仙を悦ばす為に (*prīty-artha*)、又この世の人々の為を思って (*hita-kāmyā*)。(5)

梵天を見て彼は吃驚仰天、合掌したまま身を屈め、(6)

一切の神々を伴ったこの神に、座席を用意した。(7)

金胎神（梵天）が、その上座に就いた時、(8)

ヴァスの一族であるこの聖仙は、頭を垂れたまま（右繞の礼なしで）彼の周りを巡ったが、(9)

最高神梵天も、クリシュナを嘉して、（着席する様勸めると）(10)

彼は喜び、且つはいたく恐縮して、梵天の側に座った。(11)

そして光り輝くこの聖仙は、最高神梵天に向かって次の様に言った。(12)

「尊きお方よ、私はこれなる最高に尊崇されている詩 (*kāvya*) を造りました。(13)

梵天様、私は以前、秘説ヴェーダ (*veda-rahasya*) と、その他を説き明しました。(14)

もろもろのヴェーダを（敷延して）、それらが補助学 (*aṅga*) やウパニシャド (*upaniṣad*) を具えるようにしました。(15)

もろもろの古譚 (*itihāsa*) や古伝説 (*purāṇa*) の開目 (*unmeṣa*) と閉目 (*nimiṣa*)（各種）、(16)

時間 (*kāla*) と名づけられる三種のもの、即ち過去、現在、未来。(17)

老、死の恐怖、病氣 (*jarā-mṛtyu-bhaya-vyādhi*)<sup>54</sup>の有無の確定、(18)

各種の人倫の道（=法 *dharma*）、諸住期 (*āśrama*) の特徴、(19)

<sup>54</sup> 通常は「生老病死」と列挙される筈の、この合成語を相違積に取るか、依主積に取るべきか判明しない。

- 全ての古伝説 (*purāṇa*) が（最終の）目的としている四姓 (*cāturvarṇya*) の  
きまり、 (20)
- 苦行と梵行、大地と日月、 (21)
- 遊星や惑星の数量、諸劫期 (*yuga*) の長さ (*pramāṇa*)、 (22)
- リゲー、サーマー、ヤジュルーヴェーダと、アタルヴァ ヴェーダ  
(*vedādhyātman*)、 (23)
- 論理学 (*nyāya*)、音韻学、医学、パーシュパタの知識、 (24)
- 神や人間にまつわる、誕生のさまざま。 (25)
- もろもろの巡礼地 (*tīrtha*) と聖地 (*puṇya deśa*) の枚挙、 (26)
- 聖河、聖山、聖森、聖海のそれ。 (27)
- 色々な神の都、色々な劫 (*kalpa*) の枚挙、更に上手な戦争法、 (28)
- 各種の方言、この世の日常生活や慣例 (*loka-yātrā-krama*)、 (29)
- その他、物事万事百般。神よ、どうか（それ以上は）もう御容赦下さい」  
(30)

梵天（曰く）。

- 「苦行優れ、仙人の最たるヴァシシュタよりも、 (31)
- 余は汝のことを勝れたものと思う。今や汝は秘密の知識を見出した故  
に<sup>55</sup>。 (32)
- 誕生以来、真実にして、梵を説く語 (*go*) を我等は知っているが、  
(33)
- 汝は詩 (*kāvya*) と言われるものを語った。さればそれは将来（末永く）  
詩として存続するであろう。 (34)

<sup>55</sup> Vasiṣṭha は Vyāsa の曾祖父に当っている (MBh. 1. 169. 4ff.). Cf. also,  
*tvayaiva kathitaḥ pūrvam sambhavo dvijasattama*  
*vasiṣṭhasya sutaḥ śaktiḥ śakteḥ putrah parāśarah* (6)  
*parāśarasya dāyādah kṛṣṇadvaiṣṇavāno munih*  
*bhūyo narāyaṇa-sutam tvam evainaṃ prabhāṣase* (MBh. 12. 337. 6-7)  
*caturthas tvam vasiṣṭhasya tat tvam ākhyāhi me mune*  
*ahiṃsayitvā kenaha brahmaṇyā vidhīyate* (MBh. 13. 25. 3)

- この詩を凌駕する事は、如何なる詩人とて不可能である。(35)
- 恰も、家長期<sup>56</sup>を残余の三つの住期が凌駕し得ない様に<sup>57</sup>。(36)
- (人々は) 痴呆、盲、聾、狂の状態にまま、この世界は真暗 (*tamas*) であつたであろう、(37)
- 若し汝が知 (*jñāna*) の火によって、明らめなかったならば。(38)
- 自らの業 (*svakarma*) によって包まれ、真暗 (*tamas*) の故に視力を失っていた (*andha*) 人々の (39)
- 知の眼 (*buddhi-netra*)<sup>58</sup>は、(汝の) 知の眼膏の細小棒 (*jñānāñjana-sakāka*) によって回生喜悅 (*utsava*) した。(40)
- 倫理、実利、愛欲、解脱 (と言う人生四大理想) を、(時に) 簡潔に又 (時に) 敷衍して説き明かす事により、(41)
- 汝はこのバーラタの太陽 (*bhārata-sūrya*) によって、人々の闇黒 (*tamas*) を払った。(42)
- ヴェエダの月光 (*śruti-jyotsnā*) に輝き、古伝説 (*purāṇa*) の満月に照らされて、(43)
- 清涼な夜蓮である人々の、知性 (*buddhi*) は目覚め、開花した。(44)
- 迷妄の覆いを打ち破る古譚 (*itihāsa*) の灯火 (*pradīpa*) により、(45)
- 世間の奥座敷 (*loka-garbhagrha*) は隅々まで、在るべき様に照らし出された。(46)
- 目次の巻を発端 (種: *bīja*) とし、パウローマ、アースティカ (の巻) と根を張り、(47)
- サンバヴァ (の巻) を幹として拈げ、サッバー、アーラニヤ (の巻) を梢 (*viṭaṅka*) となし、(48)
- アラニーの巻の色鮮やかに (*rūpādhyā*)、ヴィラータ、ウドヨーガを樹液とし (*sāra*)、(49)
- ビーシュマの巻を大枝となし、ドローナの巻を葉となし、(50)

<sup>56</sup> Cf. Hara 1989, 1997.

<sup>57</sup> For this verse, cf. Kirste 191.

<sup>58</sup> 或いはこの合成語は相違積 (「知性も眼も」) に取るべきかも知れない。

カルナの巻に色鮮やかな花を添え、シャリヤの巻に芳香湛え<sup>59</sup>、 (51)

ストリーの巻とアイシーカの巻を木蔭とし、シャーティの巻に大きな果  
実、 (52)

アシュヴァメーダの巻を甘露液とし、アーシュラマ安住の巻を救護所と  
し、 (53)

マウサラの巻をヴェーダの精髓 (*śruti-saṃkṣepa*) とし、補遺の巻に鳥の  
宿る、 (54)

この朽ちる事なきバーラタの大樹 (*bhārata-druma*) は、  
全ての著名な詩人達の（取材するところ、彼等の）生活の糧となるであろ  
う、

恰も（慈）雨が一切生類を恵むように。 (55-56)

スータ（曰く）

この様に、彼に仰せになった後、かの聖なる、世界の創造者梵天は、仙  
人や神々の群れと共に、御自分の館にお帰りになった。 (57-58)

この木の、神々すら断つ事の出来ない、甘美にして穢れなき味わいを具  
えた花と果実の出現（とその繁榮 *udaya*）

を、余は末永く物語るであろう。 (59-60)

### MBh. 1. 1 (Appendix) の解説

Grantha-, Telugu-, Malayālam の南インド写本群にのみ伝承されるこの  
MBh. の「梵天出現」物語は大別して以下の五つの部分より成っている<sup>60</sup>。

[1] Vālmīki の場合は *krauñca* 鳥の悲哀 (*soka*) を見て偶然 (*śloka*) を発見

<sup>59</sup> (51) と (52) の後に次の様な追加部分が存在して、それらは *gadā-parvan*,  
*aiśiṣeṣat*, *saṃpṛkṣat*, *anuvāsanika-parvan* にも言及している。

*gadā-parvāpakva-phalair aiśiṣeṣat-phalodayaiḥ*  
*saṃpṛkṣaiḥ parva-sahitaiḥ phala-saṃskāra-kāraṇaiḥ*  
*anuvāsanikaṃ parva rasam ity abhidhīyate*

<sup>60</sup> Lüders は更に Pāsupata 派への言及もその南インド性の証左と考えた。(25=1141)

し、梵天はその冒頭部分に現れて Rāmāyaṇa を完成させるよう勧めているが、Vyāsa の場合には梵天は彼の MBh. 作製の完成時、即ちその最終段階で出現している。完成最終場面での出現は仏陀の「梵天勸請」の場合と類似しているが、Vyāsa の場合は仏陀の躊躇と異なって、最初からそれを公開する意思を有していた。彼はそこで既に伝達すべき相手である弟子を探しているのみならず、伝承によっては書写生を求めている。その点では Vyāsa は、Vālmīki と仏陀があくまで受身で、公開には必ずしも積極的意思を持たなかったのと著しい対蹠を示している。彼の意図を汲んで、梵天は直ちに彼の前に姿を現すが、梵天を見た彼が恐縮感激するのは Vālmīki の場合と同様である（1-12）。

[2] 併し恐縮するにも拘らず、彼は梵天を前にして Kāvya と称する自作の優れた所以を喋々と説いて喧伝する。彼は自作が宗教、哲学、法制、天文、地理その他万般に亘ると言って、その普遍性を誇る。彼はそれを最初は *ākhyāna*（物語）(1) と呼んでいるが、梵天に語る件ではその同じ自分の物語った (*khyāpita* (14)) ものを、「世に貴ばれる *kāvya*」(13) と称している。元来 Vyāsa は四つの Veda の作者とされていたが、彼は更に補助学 (*āṅga*) と奥義書 (*upaniṣad*) を創って「本集」部を強化し、更にそれらにはない新しい要素を加えてここに「第五の Veda」を創作したという。彼の新作は古伝説 (*itihāsa, purāṇa*) の類を取混ぜて、生死の秘密を解く宗教哲学の文献の様相を具え、又法 (*dharma*)、住期 (*āśrama*)、四姓 (*cāturvarṇya*) の社会制度から、言語 (*vākya-jāti-viśeṣa*)、聖地 (*tīrtha*) や山川に亘る地理、天文暦法、4 ヴェーダ、論理 (*nyāya*)、医学、Pāśupata 派哲学をも含み、正に人事百般に亘るものであると言う。それは叙事詩自らがその最初と最後に「ここにはないものはどこにも無い」と豪語している<sup>61</sup>のを想起せしめる（13-30）。

[3] これに対して梵天は彼の説く所を承認して<sup>62</sup>、その作品が世間の蒙

<sup>61</sup> MBh. 156. 33=18. 5. 38

*dharme cārthe ca kāme ca mokṣe ca bharataṣabha  
yad ihāsti tad anyatra yan nehāsti na tat kvacit*

を啓く前代未聞の最も優れた詩 (*kāvya*) であると褒め称え、汝が若し *dharma, artha, kāma, mokṣa* の 4 大目標を説くこの詩を説かなかったならば、世界は無知の闇黒に留まったであろうと言うが、この部分は「梵天勸請」の佛にして法を説かざれば、衆生は闇黒に留まるとなすに似、「世の為、人の為」(*lokānām hita*: 5) の表現も「梵天勸請」の文言を想起せしめる (31-46)。

[4] 梵天は彼の創作を大樹 (*bhārata-druma*: 56) に譬えて、それを構成している各巻を固有名詞で呼んで、それぞれに根、幹、葉、花等の樹木の構成部分を配当しているが、そこには共時的空間感覚のみならず、果実にも言及して通時的時間感覚も混入している。この部分は所謂叙事詩の Parvan-List に相当する部分であるが、この点に就いては以下に別に論ずる。そして最後に MBh. が今後人口に膾炙し、人々はこれに取材して夫々詩作劇作に専念するであろうと予言し、その将来を祝福したまま天上に帰還するが、出現時と同様帰還時も梵天は単独ではなく、多くの神々を眷属として従えている (47-56)。

[5] 最終部分は Sūta の決意を語って終わっている (57-60)。

### Parvan-list

周知の通り、今に伝わる MBh. には幾つかの Parva-saṃgraha と称するものがあって、その間の出入りは複雑な問題を含んでいる。これに関する詳細な研究を発表したのは M. Winternitz で、彼によると MBh. には 20, 24, 96, 122 の巻に分ける事が行われていたという<sup>63</sup>。併し一般には、次の二つの Parvan-List が最もよく知られている<sup>64</sup>。即ち、通常 18 の Major-Parvan に分類されるこの叙事詩には、今一つ Sub-parvan による分類法があって、それは全体で 100 を数える。今一例を挙げるならば、有名な

<sup>62</sup> Sullivan は梵天と Vyāsa の類似性、同一性を論じて、後者は前者の「化身」の如くであるとしている (pp. 80-100)。

<sup>63</sup> Winternitz (2) 301-313.

<sup>64</sup> Kirste-Bühler.



Bhagavad-gītā は 18 Major-Parvan の分類によるとその第 6 章 Bhīṣma-parvan に入っているが、100 Sub-parvan の分類ではその第 62 章 Bhagavadgītā-parvan に相当している。

この二つの Parvan-list の何れが古いかは確定の仕様も無いが、恐らくは MBh. 増広拡大の間に Parvan の名称に追加変更が行なわれ、その際通常の 18<sup>65</sup>が、より古い Sub-parvan List から選び出されて現在のものとなり、一方 Sub-parvan List の方も随時 100 にまとめ上げられて行ったものと推定される<sup>66</sup>。併し、現在知られている MBh. 最古の Parvan List は、仏教学者の間で通常 Spitzer Manuscripts (MS. Spitzer) と呼び習わされる、西暦紀元前後の中央アジア Qizil 出土のアビダルマ関係写本の中に見出され、それは今から 30 年前ドイツの D. Schlingloff によって公表され<sup>67</sup>、近時更に E. Franco によって解明された<sup>68</sup>。

さて、再び我々の問題に立ち帰るに、既述の通りその最後部 [4] (47-56) は叙事詩を樹木に譬え、叙事詩の各巻を樹木の諸部分に配当しているが、そこに見える各巻の名称に我々は Parvan-list に相当するものを発見し、しかもそれは偶々 18 を数えている<sup>69</sup>。その中の或る者は 18 Major Parvan-List に、又或る者は 100 Sub-parvan-List の中に対応を見出して、今それを表示すれば以下の如くである<sup>70</sup>。

Samgrahādhyāya.

- |              |                    |
|--------------|--------------------|
| (1) Pauloma  | : 4 (Sub-parvan).  |
| (2) Āstika   | : 5 (Sub-parvan).  |
| (3) Saṃbhava | : 7 (Sub-paravan). |

<sup>65</sup> For the number 18, cf. Stein.

<sup>66</sup> Sukthankar as quoted in Schlingloff 335 note 7.

<sup>67</sup> Schlingloff. (1) 326-328. and (2)

<sup>68</sup> Franco 8-10.

<sup>69</sup> Winternitz (2) 313-314.

<sup>70</sup> 以下の図表は D. Schlingloff が JAOS. 89 336-337 に MS Spitzer を中心として作成した図表に準拠している。

- |                    |   |   |
|--------------------|---|---|
| (4) Sabhā-aranya   | : | (20+29 Sub-parvan) === 2+3 (Major-parvan).                      |
| (5) Araṇī          | : | 44 (Sub-parvan <i>āraṇeya</i> ).                                |
| (6) Virāṭodyoga    | : | 45 (Sub-parvan) ===== 4+5 (Major-parvan).                       |
| (7) Bhīṣma         | : | 60 (Sub-parvan <i>bhīṣmābhiṣecana</i> )<br>== 6 (Major-parvan). |
| (8) Droṇa          | : | 65 (Sub-parvan <i>droṇābhiṣeka</i> )<br>== 7 (Major-parvan).    |
| (9) Karṇa          | : | 73 (Sub-parvan) ===== 8 (Major-parvan).                         |
| (10) Śalya         | : | 74 (Sub-parvan) ===== 9 (Major-parvan).                         |
| (11) Strī          | : | 81 (Sub-parvan) ===== 11 (Major-parvan).                        |
| (12) Aiśika        | : | 79 (Sub-parvan) ===== 10 (Sauptika-parvan).                     |
| (13) Śānti         | : | 80 (Sub-parvan) ===== 12 (Major-parvan).                        |
| (14) Aśvamedha     | : | 91 (Sub-parvan) ===== 14 (Major-parvan).                        |
| (15) Āśrama-sthāna | : | 93 (Sub-parvan <i>āśrama-vāsa</i> )<br>===== 15 (Major-parvan). |
| (16) Mausala       | : | 96 (Sub-parvan) ===== 16 (Major-parvan).                        |
| (17) Śiṣṭa         | : | 99+100 (Sub-parvan <i>hari-vaṃśa bhaviṣyat</i> ).               |

この中先ず注目すべきは Anuśāsana-parvan がここに欠落している事で、それは MS Spitzer の場合と事情を同じくしている。Schlingloff と Franco によれば、MS Spitzer に於けるこの欠落は、第 13 巻が第 4 巻と共にこの時代、即ち西暦紀元前後に未だ叙事詩の一部となっていなかった事を意味しているという。概して我々の List の最初の部分は Sub-parvan のみに対応を見るが、第 4 巻以後は Major-parvan とほぼ等しい。更に *āranyakam*, *āraṇeyam* の名称も MS Spitzer に見出される。又、問題の第 4 巻はこの List では Virāṭodyoga となって、第 5 巻と合体して述べられているが、MS Spitzer では第 5 巻の Udyoga-parvan は寧ろ二分されて、(*nir*) *yānam* と *bhaga* (*vad*) *yānam* に分れている。最後が Mausala で終わっている事も MS Spitzer と同一で、通常の 18 Major-Parvan-List の最後に位する第 17 巻 (*mahā-prasthāna*) と第 18 巻 (*svargārohaṇa*) はここにも見えない。そして補

遺部分は Śiṣṭa と呼ばれ、それは MS Spitzer の Khila に対応している。その意味では MS Spitzer と我々の List の間には、或る種の共通点が見出される如くである。

### 叙事詩の「書写」

上に邦訳した MBh. の南インドのみに伝えられた「梵天出現」物語は、その後 Devanāgarī 写本にも移されて、Nīlakaṇṭha や Ratnagarbha の注釈する所となったが、更にそれは後に Kashmir の写本群にも挿入されたと推定されている。そして北インド写本群の幾つかには、更に後世有名になった Gaṇeśa による叙事詩の書写伝説が挿入される様になった<sup>71</sup>。それによると、本邦の古事記の書写が稗田阿礼と太安万侶の協力であったのと同様に、MBh. のそれは Vyāsa と Gaṇeśa の合作であった<sup>72</sup>。彼は叙事詩の作者 Vyāsa の依頼によって超人的速度を以ってその唱えるところを筆記したと言われるが<sup>73</sup>、それは元来の MBh. の Grantha MS に見出されないのみならず、Kṣemendra の Bhāratamañjarī にも見えない。

不思議にも却って北方伝本群にのみ後世伝えられるようになったこの伝承が、文献の上で最初に現われるのは Rājasekhara の Bālabhārata、又の名 Pracanda-pāṇḍava Nāṭaka (ca 900A. D) であるが、それは又 11 世紀アラビアの旅行者 *al Birūnī* の記載するところともなった<sup>74</sup>。Vyāsa はそこで Vālmiki に向かって、彼が如何にして Gaṇeśa を書記として得、且つ上手に彼を丸め込んだか、その経緯を物語っている<sup>75</sup>。それによると Gaṇeśa

<sup>71</sup> Lüders, 1144=25, Winternitz 296.

<sup>72</sup> Kane 215. 但し Gaṇeśa がここに登場するのは如何にも奇異である。というのも彼は Purāṇa 文献に於いてこそ時に最高神となって尊崇されるが (Rocher 72-79)、MBh. の神界には姿を見せず、この序の部分でも彼は神でありながら仙人の下位に立っている故である (Winternitz 336)。

<sup>73</sup> Getty 3-4.

<sup>74</sup> Sachau 134. Cf. Rocher 72. Rocher の論文は簡潔ではあるが、極めて有益である。

<sup>75</sup> 9-13 世紀の成立と思われる Gaṇeśa-gītā (Yoroi 8) も、この伝説についてはその片鱗さえも留めていない。そこで彼は「梵」と同一視され、又時に「梵」以上 (2. 15, 3. 7) とされるが、「梵天」の概念はそこでは寧ろ希薄である。但しここには

は、Vyāsa の依頼を引き受けるに当って一つの条件を出したが、後者も前者に同様の条件を提示して、ここに両者の間に契約が成り立つ形となる<sup>76</sup>。この伝説は併し、それ以前からかなり普及していたものと思われ<sup>77</sup>、それは 11 世紀以後にカンボジアに伝えられ、又 Gaṇeśa の書記としての性格<sup>78</sup>は Śiva 教のタントラに残り<sup>79</sup>、その痕跡は Champā にも見られる<sup>80</sup>。今その邦訳を試みれば次の如くである<sup>81</sup>。

上の (30) の後で Vyāsa は梵天に向かって次の様に言う。

「でもこの地上には、これを書写する者が誰もおりません」

すると梵天はこれに答えて。

「仙人よ、詩の書写の為ならガネーシャがいるではないか」<sup>82</sup>

ここで Sauti の言となり、上の Verse 57 が現れる。

サウティ曰く

この様に彼に言って梵天は自分の家に帰って行った (=57)。

そこでサティヤヴァティーの息子であるヴァーサはヘーランバ (heramba) の事を思い出した (心に念じた)。

念じられるや (*smṛta*) 否や、ガナの主にして信者の思いを叶える

障害の主は、ヴェーダの編纂者 (*veda-vyāsa*) がいる所にやって来た。

(5)

ヴァーサは彼を歓迎し、どうぞお座り下さいと薦めて次の様に言った。

「おお、穢れ無き者よ。ガナの指導者よ、このバーラタの筆記者 (*lekha-*

「知識」の重視が見られる (1. 67, 3. 46: Yoroï 2)。

<sup>76</sup> Courtright 152, Brockington 21-22.

<sup>77</sup> Winternitz 299 Rocher 71 and 79.

<sup>78</sup> 彼の折れてしまった一本の牙 (*danta, rada*) は彼の筆記具になったと言われる。  
Bühnemann 31

<sup>79</sup> Getty 48

<sup>80</sup> Getty 51.

<sup>81</sup> Cf. Lüders 1144=25, Winternitz 296-7, Sullivan 11 and 118-9.

<sup>82</sup> 直訳は「彼が思出さるべきである」(*smṛyatām*)。

ka)<sup>83</sup>となってくれ、私が（それを先ず）心に分別して物語るから」  
 それを聞いて障害の主は答えた。「若し筆記中に私の筆 (*lekhani*) が、一瞬たりとも停滞する事がなければ、私は筆記者となりましょう」 (10)  
 これに対してヴァーサはこの神に答えて言った。「汝が判らない時 (*abuddhā*) は何時でも筆記するのを止めるように」  
 「判りました (om)」と答えて、ガネーシャは筆記者となった。  
 その時、仙人は好奇心から密かに文中 (*grantha*) に蟠り (*granthi*) を造った。  
 でも、その間にも仙人ドヴァイパーヤナは彼への約束通り、物語り続けた。  
 「私は 8800 の頌を知っている。 (15)  
 シュカもきっと、サンジャヤも恐らくは、知っているだろう、  
 仙人よ、頌の集りはこんにちでもしっかりと結び合わされている (*grathita*)。  
 隠されている (*prasṛita*) 意味が深長であるから、それを壊す事は出来ない」  
 全知のガネーシャではあったが、一瞬（何の事かと）不審のまま考え込んでしまった。  
 この間にヴァーサは、別の数多くの頌を造って行った。 (20)

Vyāsa はわざと文中に蟠り *granthi* (“knifflische Verse” Lüders, “complicated sentence” Rocher.) を設けて、全能の Gaṇeśa を惑わし、その間に時間稼ぎをしたとこの伝説は伝えている<sup>84</sup>。

<sup>83</sup> Cf.

*sakṛd-ukta-gr̥hītārtho laghu-hasto jītākṣarāḥ*  
*sarva-sāstra-samāloki prakṛṣṭo nāma lekhakāḥ* (IS. 6654)  
*medhāvī vāk-paṭur dhīro laghu-hasto jītendriyāḥ*  
*sarva-sāstra-parijñātā eṣa lekhaka ucyate* (IS. 4976)

<sup>84</sup> 但し比較的近年の古銭学研究によれば、Gaṇeśa の伝統は西暦前四世紀の Indo-Greek 時代に遡り得る可能性がある。又玄奘が大唐西域記の 38、「迦畢試国の 7」

### 問題点

以上我々は佛の成道、並びに Vālmīki と Vyāsa の叙事詩創作に際しての「梵天の出現」について文献の関係箇所を紹介した。釈迦の仏教開教といい、二大叙事詩の創作といい、何れも古代インド文化史の極めて重要な局面であるから、そこにバラモン教の最高神梵天が現れたとしても決して不思議ではないが、今それら三者を比較してみたらどのようなになるであろうか。筆者はこの問題に関して結論も仮説も立てることを控えるまま、以下に問題点を整理して提示するが、先立って先ず二つの叙事詩の該当部分を比較してみたいと考える。

「梵天の出現」に際して、二人の聖仙は共に吃驚仰天して彼を上座に座らせるが、Vālmīki の場合には梵天が一方的に語りかけるのみで、彼は終始 Krauñca 鳥の非業の死を悼むまま、両者の間に応答の会話は存在していない。これに反して MBh. の場合、Vyāsa は先ず自ら梵天に語りかけ、しかも自分の成果を喋々と弁じて自画自賛に終始し、梵天は彼に応答して両者の間に会話が成立している。

次に三者を比較するに、先ず第一に注目すべきは「梵天出現」時の差異の問題である。三者の中で仏典と Rāmāyaṇa の場合に、梵天はそれぞれ開教と創作の開始時に現れて、彼等夫々に布教と創作の決断を促しているが、Mahābhārata の場合には彼は著者の創作活動の完了時に現れている。又佛と Vālmīki は、その布教と創作に元来積極的意図を持たなかったが、Vyāsa の場合には大いにその意思があり、彼は最初からそれを伝える弟子 (śiṣya) や書記 (lekṣhaka) を探している。

第二には梵天の三人に対する態度の差違がある。二大叙事詩の場合には梵天はその作者達の前に現れて彼等を嘉し、賞賛して激励する形をとり、

---

に言及する比良婆洛山（象堅）= Pilusāra = Pillaiyar は、Gaṇeśa のドラヴィダ名であると言われる（Dhavalikar 142-145 桑山 280-1, 298）。尚、カーピシー＝ガンデラに於ける Gaṇeśa 像に関しては、桑山 284, 313-4, 316, 318, 322-7, 372-3 参照。

更に凡ては自分の計らいであると言う事を忘れない。ここに梵天は飽く迄彼等の上位に立ち、作者である Vyāsa も Vālmīki も梵天に褒められて、それを身の光栄と喜んでいる。これに対し仏典においては梵天は佛の下位に立ち只管懇願依頼しており、仏の梵天への優位は後世に至るまで一貫して変わる事がなかった。ここに於いて叙事詩における梵天の上位、仏典に於けるその逆転が明らかである。

然らばそれら三者はどの様に関連するであろうか。正確な年代的順序を立てる事は、一般のインドのテキスト成立の場合と同様極めて困難でこの場合もその例外ではない。唯、「梵天勸請」の場合は漢訳の最古のものによって辛うじてその下限が決定され得るが、その上限を究める事は不可能である<sup>85</sup>。併し、たとえ上限が判ったとしても、それがテキストとして固定する以前に久しく信者の間に口碑の形で伝えられていた事が想定されねばならない。それは叙事詩の「梵天出現」の場合も同様で、仏典の場合よりも寧ろ条件が悪い。従ってこの三者の間に年代的な前後関係を立てることは不可能であり、最初期は寧ろ今は伝わらない「口伝」の形でそれぞれに流布していたものと思われる。

今、仮に中村、高崎博士に従って佛伝の「梵天勸請」に「佛教の優位性誇示」を見ようとすれば、そこには当然この物語の成立以前に庶民や信者の間に「梵天の全能性」が前提されていたこととなる。「梵天の全能性」が大前提とされていればこそ、「転迷開悟」や「叙事詩作製」の如き一大イベントに彼が出現し、介入して来るのも不自然ではない。彼が優位に立って彼等の労をねぎらい、彼等を激励する事は当然考えられる事であったと思われる。従って古くからインド一般に最高神梵天の嘉納、激励の Motif が存在していたものと想定される。

その様に考えると、同じ様に梵天が作者を慰労激励している二つの叙事詩にあって、何れがより古い形を保っているかという事が問題となる。それらは何れも後世の追加部分に現われるが、一見して同じ梵天の介入でも

<sup>85</sup> 或いは仏教美術の側から、上限を推定する事も可能であるが、今は触れない。

Rāmāyaṇaの方がより自然、且つ素朴の印象を与える。何故なら Rāmāyaṇa の場合、Krauñca 鳥の悲劇から Śloka の誕生まではそれ程不自然でなく、梵天の称讃も決して大袈裟ではない。これに反して Mahābhārata の場合、作者と梵天の会見の設定こそ Rāmāyaṇa と変わらないが、ここで Vyāsa は自分自身がこの叙事詩のみならず、ヴェーダ聖典の著者であると言い、謂わば第五のヴェーダとしてここに叙事詩を著したと言う。そしてそこには古いヴェーダ聖典には存在しなかった新しい要素として伝説、哲学、宗教、法制などがあり、彼は梵天を前にしてその普遍妥当性を誇示する。これに対する梵天の答えも大袈裟で、その効能称讃もより詳細を極めている。

従って二つの叙事詩の場合、「梵天出現」の Motif は Rāmāyaṇa が先行していたと思われるが、然らばこの両者と仏典の「梵天勧請」は如何なる関係に立つであろうか。若しも佛伝作者が当時一般に流布していた「梵天勧告」を知っていて、中村、高崎博士の言う如くこれを踏まえて「梵天勧請」を思いついたとすれば、仏教を優越させる為にはその上下関係を逆転させる必要があったことになる。Rāmāyaṇa に於いて梵天は尚自己の権威を誇示して Vālmiki が Śloka を創ったのも、もともと己のはからいであったと言うのを忘れなかったが、仏典における梵天にはその様な自負や自意識は完全に払拭されて、彼はひたすら辞を低うして佛に懇願する形を取っている。この様に考えると仏伝作者は Rāmāyaṇa の「梵天介入」を踏まえ、それを意識的に変曲して「梵天勧請」物語としたものと推論される。

この仏典の「梵天勧請」に現われた「梵天による称讃」を踏まえて今一度、それを更に増広拡大してより大袈裟にしたものが Mahābhārata の「梵天介入」物語である。そして今回梵天は今一度最高神としての従来の地位を回復した。その様に考えると成立の順序は一応 Rāmāyaṇa の「梵天介入」、仏典の「梵天勧請」、Mahābhārata の「梵天介入」ということになる。そして今回は仏典に倣って梵天は「世のため、人のため (lokāṇām hita)」という言葉辞を用い、「公開しなければ衆生は無知闇黒 (tamas) の中に留まるであろう」とも言っている。

併し、仏教徒がその意識的創作において故意に梵天を下位に据えたとす



れば、それがバラモン教からの反発を喚起するのは当然の勢いであった。仏教がインドから追放されたのには幾つかの理由があったと思われるが<sup>86</sup>、その一つとして開祖釈迦<sup>87</sup>を梵天の上に据えた事にあったかも知れない。

#### Abbreviations

- ABORI : Annals of the Bhandarkar Oriental Research Institute (Poona).  
 IT : Indologica Taurinensia (Torino).  
 JAOS : Journal of the American Oriental Society (Baltimore).  
 JIPh : Journal of Indian Philosophy (Dortrecht).  
 JRAS : Journal of the Royal Asiatic Society (London).  
 WZKS : Wiener Zeitschrift für die Kunde des Süd-und Ost-Asiens (Wien).  
 ZDMG : Zeitschrift der Deutschen Morgenlandischen Gesellschaft (Wiesbaden).

#### Bibliography

- Bühler-Kirste : G. Bühler and J. Kirste, "Indian Studies. No. II. Contributions to the History of the Mahābhārata," in J. O. F. Kirste, Kleine Schriften, herausgegeben von W. Slaje (Wiesbaden 1993) pp. 183-240.  
 Bühnemann : G. Bühnemann, Forms of Gaṇeśa (Wichtrach 1989).  
 Courtright : P. R. Courtright, Gaṇeśa, Lord of Obstacles, Lord of Beginnings (Oxford 1985).  
 Dhavalikar : M. K. Dhavalikar, "Antiquity of Gaṇeśa-The Numismatic

---

<sup>86</sup> Cf. Jaini (2).

<sup>87</sup> Mīmāṃsā の巨匠 Kumāṛila は仏陀が Kṣatriya の身分でありながら「説法」し、「乞食」した事が法典の規定 (MS. 10. 75, 77) に反している事を挙げて批判している。Cf. Halbfass 381, Hara 1985 314。但しこの点は夙に Poussin が指摘した所であった (Poussin 373.)。本邦では池田澄達師がこれを指摘している (池田 492.)。

- Evidence,” IT. 8-9 (1980) pp. 137-145.
- Edgerton : F. Edgerton, “Hour of Death,” ABORI 8 (1927) pp. 219-249.
- Franco : E. Franco, *The Spitzer Manuscript, The Oldest Philosophical Manuscript in Sanskrit* (Wien 2004).
- Getty : A. Getty, *Gaṇeśa, A Monograph on the Elephant-faced God* (Oxford 1936).
- Halbfass : W. Halbfass, *Indien und Europa* (Basel/Stuttgart 1981).
- Hara 1972 : M. Hara, “Vālmiki as the Singer of Tale,” S. K. De Memorial Volume (Calcutta 1972) 117-128.
- 1985 : “A Note on the Sādhīna Jātaka,” ZDMG Supplement VI 1985 pp. 308-314.
- 1997 : “A Note on the grhasthāśrama,” *Lex et Litterae* (Festschrift O. Botto) (Torino 1997) 221-235.
- Hiltebeitel : A. Hiltebeitel, *Rethinking the Mahābhārata, A Reader’s Guide to the Education of the Dharma King* (Chicago 2001).
- Horsch : P. Horsch, *Vedische Gāthā-und Śloka Literatur* (Bern 1973).
- Jaini (1) : P. S. Jaini, “Buddha’s Prolongation of Life,” *Collected Papers on Buddhist Studies* (Delhi, 2001) pp. 191-199.
- Jaini (2) : P. S. Jaini, “The Disappearance of Buddhism and the survival of Jainism in India: A Study in Contrast,” in his *Collected Papers on Buddhist Studies* (Delhi 2001) pp. 139-154.
- Kane : P. V. Kane, *History of Dharmaśāstra* II. 1 (Poona 1941).
- Kölver : B. Kölver, “Überlagerungen im Rāmāyaṇa: Die Legende von der Erfindung des Śloka,” *WZKS.* 29 pp. 27-41.
- Leslie : J. Leslie, “A Bird Bereaved: The Identity and Significance of Vālmiki’s Krauñca,” *JIPh.* 26 1998 pp. 455-487.
- Lamotte : É. Lamotte, *Le Traité de la Grande Vertu de Sagesse I* (Louvain 1949).
- Lüders : H. Lüders, *Kleine Schriften* 22-26 (=Orientalistische Literaturzeitung 1929 1137-1145).

- Poussin : Louis de la Vallée Poussin “On the Authority (Prāmāṇya) of the Buddhist Āgamas,” JRAS 1902 pp. 363-376.
- Rocher : L. Rocher, “Gaṇeśa’s Rise to Prominence in Sanskrit Literature,” in Ganesh Studies of an Asian God, ed., by R. L. Brown (Albany 1991) 69-83.
- Sachau : E. C. Sachau, Alberuni’s India, vol. I (London 1914).
- Schlingloff (1) : D. Schlingloff, “Fragmente einer Palmblatthandschrift philosophischen Inhalts aus Ostturkistan (Ms. Spitzer),” WZKS 12-13 (1968/69) 323-328.
- Schlingloff (2) : D. Schlingloff, “The Oldest Extant Parvan-list of the Mahābhārata,” JAOS 89 (1969) pp. 334-338.
- Shimoda : “Buddha within and beyond History: The Buddhology in the Saddharmapuṇḍarīka in Connection with an Episode of ‘God Brahman’s Request for the Buddha’s First Sermon,’” 聖巖博士古稀記念論集、東アジア佛教の諸問題（東京 2001） pp. 93-114.
- Stein : O. Stein, “The Numeral 18,” “Additional Notes on the Numeral 18,” Kleine Schriften (Stuttgart 1985) pp. 515-553.
- Sullivan : B. M. Sullivan, Kṛṣṇa Dvaipāyana Vyāsa and the Mahābhārata: A New Interpretation, (Leiden, New York, Köln 1990).
- Vaudeville: Ch. Vaudeville, “Rāmāyaṇa Studies I, The Krauñca-vadha Episode in the Vālmiki Rāmāyaṇa,” JAOS. 83 (1963) pp. 327-335.
- von Simson : G. von Simson, “Characterizing by Contrast: The Case of the Buddha and Devadatta, Bhīṣma and Karṇa,” in Jainism and Early Buddhism, Essays in Honor of Padmanabh S. Jaini, Part II ed. by Olle Qvarnstrom, (Fremont 2003) pp. 621-635.
- Winternitz (1) : M. Winternitz, Geschichte der indischen Literatur (Leipzig 1907).
- Winternitz (2) : M. Winternitz, “On the South-Indian Recension of the

- Mahābhārata,” *Kliene Schriften* (Stuttgart 1991) 286-328.
- Winternitz (3) : M. Winternitz, “Ganeśa in the Mahābhārata,” *Kleine Schriften* (Stuttgart 1991) 333-337.
- Yoroi : K. Yoroi, *Gaṇeśagītā* (The Hague-Paris 1968).
- 原 1978 : 原実、「ラーマ物語と桃太郎童話」足利惇氏博士喜寿記念  
オリエント学インド学論集（東京 1978）523-539.
- 1989 : 「家長期」藤田宏達博士還暦記念論集（東京 1989）123-146.
- 池田 : 池田澄達「摩訶婆羅多に於ける仏教の影響か」仏教学の諸  
問題（仏誕二千五百年記念会 東京 1935）489-547.
- 梶山赤松 : 大乘仏典（中国日本篇）I 大智度論（梶山雄一、赤松明彦  
訳）（東京 1989）.
- 上村 : 上村勝彦 インド古典詩論研究（東京 1999）.
- 桑山 : 桑山正進 カーピシー＝ガンダーラ史研究（京都 1990）.
- 森他編 : 森章二、本沢綱夫、岩井昌悟、原始仏教聖典資料による釈  
尊伝の研究（3）資料集篇Ⅱ（資料集 3）「仏伝諸経典および  
佛伝関係諸資料のエピソード別出典要覧」中央学術研究所  
2000.
- 中村 : 中村元 ゴータマ ブッダⅠ（東京 1992）.
- 阪本 : 阪本（後藤）純子、「梵天勧請の原型」印度学佛教学研究  
41（1992）474-469.
- 下田 : 下田正弘、「「梵天勧請」説話と「法華経」のブッダ観——  
佛教における真理の歴史性と超歴史性——」中央学術研究  
所紀要 28（1999）pp. 69-99.
- 高崎 : 高崎直道、仏教入門（東京 1983）.
- 宇井 : 宇井伯寿、「阿含に現はれたる梵天」印度哲学研究第三  
（東京 1965）pp. 64-202.

〔後記〕 再校校閲後の最終段階で R. Tsuchida, “The Formation of the *Anukramanī*-  
and the *Parvasaṃgrahaparvan* of the *Mahābhārata*” *インド哲学仏教学研究* 13, pp. 1-  
34（2006 年 3 月）の刊行を知った。この論文は極めて重要なもので、今回参照  
出来なかったことを遺憾とする。

## Summary

### A Note on the Brahmājjesana

Minoru Hara

One of the most important events in the legendary biography of the Buddha is the god Brahmā's entreaty (*āyācana, ajjhesana*) to preach, which takes place immediately after his enlightenment. According to the traditional legend, when the Buddha attained his enlightenment under the bodhi tree, he was simply content with his accomplishment and did not think of transmitting it to others. Becoming aware of his decision Brahmā sahaṃpati in Heaven appeared in front of the Buddha. Draping his outer robe over one shoulder, and bending his right knee to the ground, he raised his joined hands towards the Buddha and requested him to teach what he had realized.

This legend has been transmitted in various versions in Pāli (MN.1.167-169=2.93, Vinaya 1.4-7, DN.2.35-40, J.1.61), Sanskrit (Mhv.3. 313-9, Lal.1.392-400) and their Tibetan and Chinese equivalents.

However, the same god Brahmā appears at the beginning of the Rāmāyaṇa and Mahābhārata, where it is described how the Epic singers made up their minds to undertake the great task of composing the whole Rāma story in *śloka*-metre (R.1.2), or teaching his disciples the great Epic (MBh.Appendix) and putting it into writing (Gaṇeśa legend). We note the same literary device of Brahmā's appearance used by the Buddhists as well as the Hindus.

Here in this paper, the relevant Epic portions are translated with the text-critical notes, and compared with each other. The most striking difference between the Buddhists and Hindus is that, while in the Hindu texts the god Brahmā appears to encourage the singers to propagate their *kāvya* or *ākhyāna*, in the Buddhist texts, the same god cordially requested the Buddha to teach his dhamma. We notice the god's superemacy to the Hindu sages (Vālmīki and

Vyāsa), whereas in Buddhist literature, it is the Buddha's superiority which is emphasised.

*Professor,  
International College  
for Postgraduate Buddhist Studies*